西郷札

傑作短編集（三）

松本清張

新潮文庫

西郷札（さいごうさつ） 傑作短編集(三)

新潮文庫　　ま-1-4

昭和四十年十一月二十五日　発行
平成　三　年四月十五日　三十三刷

著者　松本清張（まつもとせいちょう）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)三二六六—五一一一
編集部(〇三)三二六六—五四四〇
振替　東京四—八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Seichô Matsumoto 1965　Printed in Japan

ISBN4-10-110904-4　C0193

新潮文庫

西郷札

傑作短編集（三）

松本清張著

新潮社版

1662

目次

西郷札……七
くるま宿……五九
梟示抄……八五
啾々吟……一一七
戦国権謀……一五九
権妻……一九一
酒井の刃傷……二一九
二代の殉死……二四九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

面貌……二七三
恋情……三〇一
噂始末……三四九
白梅の香……三七一
解説　平野謙

西

鄉

札

西

鄉

札

去年の春、私のいる新聞社では『九州二千年文化史展』を企画した。秋には開催の予定で早くからその準備にかかっていた。私は一カ月間つづけて九州中をかけまわり、大学の図書館や寺や古社、旧家をたずね出品資料の収集につとめた。成績はよいほうで、長い出張が終わるころにはだいたいの目鼻をつけて帰ってきた。

出品の中には国宝もあるし、いわゆる門外不出のかけがえのない重要品もあるので、その取扱いや輸送に前もって万全の方法を講じねばならなかった。その計画のため、おおむね出品の決まったところで品目のあらましをリストに作ってみた。するとできあがったその表が一瞥しただけで予期以上の成果ということがわかった。ことに、切支丹物では今までにない逸品が見事にならんだ。

「おい、これは何だ、西郷札とは何だ？」

と、とつぜん若い部員がリストを見て言った。四五人の眼がそれに覗きこむと、そこには、

一、西郷札　二十点
一、覚　書　一　点

としてあった。私にもそれはわからなかった。

「誰だい、これを扱ったものは？」

とたずねると、リストを作った男が書類綴りを出して繰っていたが、

「あ、それは宮崎の支局から回ったものです。先方から出品を申しこんだことになっています」

と言った。

綴込みの手紙を見ると支局長のE君からで、「宮崎県佐土原町、田中謙三氏より申込み委託を受く。近日発送の予定」としてある。

それにしてもこの『西郷札』というのがわからなかった。名称から見て西郷隆盛に関係あるらしいことはわかるがそれ以上の知識は誰にもなかった。なかには西郷を崇拝する地方の一種の信仰札だろうと言う者もいた。しかし出品を申しこむくらいだからもっと史的価値のあるものだろうと反対意見を出す者もいる。ついに誰かが給仕を走らせて調査部から百科辞典をかりてこさせた。富山房版の同辞典には次のとおり出ている。

さいごうさつ『西郷札』――西南戦争ニ際シ薩軍ノ発行シタ紙幣。明治一〇、西郷隆盛挙兵、集ルモノ四万。(中略)同年四月熊本ニ敗レ日向(ひゅうが)に転戦スルニ及ビ鹿児島トノ連絡ガ絶エタタメ、遂ニ六月ニ至ツテ不換紙幣ヲ発行シタ。コレガイワユル西郷札デ寒冷紗(かんれいしゃ)ヲ二枚合セ、ソノ芯ニ紙ヲ挿ンデ堅固ニシタ。十円、五円、一円、五十銭、二十銭、十銭ノ六種。発行総額ハ十万円ヲ下ラナカツタトイウ。額面ノ大ナルモノハ最初ヨリ信用ガ乏シク小額ノモノノミ西郷ノ威望ニヨリ漸ク維持シタガ薩軍ガ延岡(のべおか)ニ敗レテ鹿児島ニ退却スルヤ信用ハ全ク地ニ墜チ、タメニ同地方ノ所持者ハ多大ノ損害ヲ蒙ツタ。乱後コノ損害填補(てんぽ)ヲ政府ニ申請シタガ賊軍発行ノ紙幣ノ故ヲ以テ用イラレナカツタ。(津田)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

これで疑問は解決した。これは薩軍の軍票のことである。おそらくこの出品者の父祖もこの不換紙幣をかかえて〝多大の損害を蒙った〟一人なのであろう。その子か孫かが家に残っていたものを出そうというのである。西郷ふだと読んだ連中は笑いだした。

この西郷札のことはそれなりに忘れられて、われわれは開催準備に忙殺された。夏も終わり秋風が立っていた。社告も出たし、もう時日がなかった。私は連日、鉄道や運送会社の交渉やら会場の陳列プランに没頭した。社会面では出品の解説めいた記事を連載しはじめた。

ある日、企画部員が笑いながら、

「来ましたよ、来ましたよ、西郷ふだが」

と言って小包を置いていった。宮崎支局から原稿便で着いたものらしい。ちょうど手のあいている時だったので、すぐにそれを開いた。小さい桐の木箱があり、その中にいわゆる西郷札が入れてあった。百科辞典のいうとおりのものである。長さは四寸ばかり、幅は二寸ぐらいだろう、仙花紙のような薄い質の紙を中に目の粗い寒冷紗が貼り合わせてあった。種類にしたがって黄色や藍色も昨日刷りあがったばかりのように新しかった。よほど保存を丁寧にしたものと思える。表は地に鳳凰と桐花を図案し金額と『管内通宝』の文字の下に『軍務所』という印がある。裏に返すと、「此札ヲ贋造スル者は急度軍律ニ処スル者也、明治十年六月発行、通用三ケ年限、此札ヲ以テ諸上納ニ相用ヒ不苦者也」とあった。

この西郷札とは別に桐油紙に包んだ分厚い帳があった。これが目録にある『覚書』であろう。菊判ぐらいの大きさだが三百枚ぐらいの和紙を二つに折って綴じ、毛筆で細かい字がぎっしり書

きこんであった。紙の色は茶色にすすけていた。

私は一緒に添えてある支局長のEが私に宛てた手紙を開いた。

「(略)西郷札は田中氏宅に所蔵の分より二十枚ばかり撰って送ります。別に覚書がありますがこれは田中氏の祖父の知人が書いたもので、この人が西郷札の製造にも関係したそうです。小生は内容をみていませんが、田中氏の話では種々経緯がかかれてあって面白いそうです。内容を要摘して目下掲載中の解説記事にでも回したらいかがですか」

もう一度、古い分厚な帳を取りあげて、はじめのほうをめくると別に題名らしいものはなく、

日向佐土原士族　樋村雄吾　誌す

明治十二年十二月

とあった。

私はこれを家に持って帰って読んだが、思わず夜を徹して読了した。その結果、社会部にも回さず、したがってE君の希望する記事にもならなかった。この内容を宣伝記事の材料にするには忍びなかったのである。

私は近ごろにない興奮に駆られすぐ田中氏宛てに手紙を出した。それは同氏も新聞記事にしてほしい意向があるように思われたのでその断わりと、その『覚書』を自分の手で他の機会に発表したいというその許しを請うたものであった。まもなく田中氏からは返事が来て私の身勝手な申し出を諒として、いいようにしてくれとあった。

『九州二千年文化史展』の開催中は、この『覚書』は西郷札とならんで陳列され、札のほうは珍

しがられたが『覚書』には特に注意を向ける者もなかった。

会も無事にすんで出品を田中氏に返す前に私は『覚書』を全部筆写した。こういうしだいで、士族樋村雄吾の手記を発表する段となったが、そのまま現代の活字にするには、もちろんあまり文章が古風であり、明治調の一種の風格はあっても今の世の人には馴染めない。

そのうえ、その全文は前にも言うとおり浩瀚だから思いきって縮める必要がある。結局この内容を私の文章に書き改めて、何だか私の『樋村雄吾伝』のような形式となった。といっても別に他の文献を詮索して参照したわけではなく、ただ『覚書』どおりに書いていったにすぎない。『覚書』の主人公はむろん樋村雄吾自身で『余』という第一人称で書きあらわされている。これも私の書き方では不便なので、樋村雄吾という名前どおり第三人称に改めることにした。

一

前置きが長くなったが、樋村雄吾は日向国佐土原に生まれた。佐土原は宮崎市からほど近い。旧領は島津氏の支藩である。父は喜右衛門といい三百石の藩士であった。母は同藩の内藤氏より来てつねといったが不幸雄吾が十一歳の時死去した。ほかに兄弟がなかったから彼は母の愛も同胞の情愛も知らずに育った。喜右衛門は彼が十六歳になるまで後添をめとらなかったので、五年間、彼は父の手一つに育てられ、いっさいの教育も父の手によった。

雄吾が十二歳のとき御一新が行なわれ世は明治となり、それから四年たって突然断行された廃藩置県で父は世禄を失った。廃藩置県は西郷隆盛が中心となったもので、喜右衛門の親藩の当主

島津久光を激怒せしめたという。とにかくこれによって収入の途が絶えたので、城下を去る二里の土地に田野を求めて百姓となった。しかし雇人数人を入れて耕作に従わしめたが自らは畑に立つことはなかった。

この年すすめる人があって、父喜右衛門は後妻を入れたが、これが雄吾の第二の母である。この新しい母には連れ子があり、雄吾とは五つ違いの女の子で妹となるわけであった。喜右衛門が後妻をもらったのは、おそらく新しい世が肌に合わず、百姓として余生を楽しむ気持になったからかもしれない。

この母が士族の出でないことは年少の雄吾の眼にも何となくくだけたその物腰でわかった。だいたい、島津領内は士族平民の区別のやかましいところで、近年までその風習が残っていたくらいである。ましてやそのころは、両族の平等結婚はほとんどなかった。それを平民からしかも連れ子まであるものをよんだのは、いよいよ喜右衛門が世を遁げたのか、それともこの後添が気に入ったからであろう。あたかもこの年八月には華士族平民婚嫁許可令が出ていた。新政府を嫌った喜右衛門が真っ先に新法令を実行したのは皮肉である。

家の中は何となく艶(なま)めかしくなった。母は父の年齢に合わせてつとめてじみな身装をしたが三十五歳の容色は争えず、また、新しく雄吾の妹となった季乃(すえの)も人が見てかわいいとほめる顔立ちであった。

ずっと女気のない家で育った雄吾はこの二人がきて家の空気が軟らんで楽しかった。しかし、素直にこの感情を二人の前に出すには後ろめたいものを感じて何となく拗ねた態度に出ていた。

季乃は雄吾を兄さまといって慕ったが兄から酬いられるものは邪険な冷たい仕打ちであった。しかし心から冷淡であったかは疑問で後年のことを考えあわせると、いろいろ想像できるのである。

この間『覚書』の原文にはたいした記載はなく、ただ月日が水のように流れている。

季乃の美しさは年とともに顕われて佐土原でも評判となった。雄吾が二十一歳、季乃が十六歳となった正月は、明治十年であった。

早々雄吾は鹿児島の親戚の家に年賀のために赴いているが、これはおそらく表面の理由で実はすでに物騒となった鹿児島の情勢を偵察に出かけたものと見える。

来てみると聞いた以上に形勢は緊迫していた。もうこの時は公然と戦争準備をしていたのである。雄吾は倉皇として佐土原に引き返した。この時分父の喜右衛門は病床にあったが雄吾は詳しい報告はせずに、近日西郷先生について上京するからとその許容(ゆるし)を請うた。喜右衛門は顔を天井に向けたまま、一口もその理由をきかずにうなずいたが、万事はわかっていたのであろう。

雄吾は別間に母を呼んだが、季乃は折りあしくその二三日前から母方の親戚に出向いていたので別れを言うことができなかった。原文には何とも説明がないが、おそらく心残りのするものを感じたであろう。

二月十一日、雄吾は家重代の銘刀をかいこみ鹿児島に駆けつけたが、東上軍の編成の所属は三番大隊で隊長は永山弥一郎であったと彼は誌している。

二

二月十五日、西郷隆盛は政府詰問の理由で寒風の吹く鹿児島を精兵を率いて出発したが、これから先のことは普通の歴史にあるとおりで詳しく書くことはない。『覚書』の筆者もその克明な筆で鹿児島城包囲から植木方面の戦闘を叙しているが、別段関係もないから略する。ただこの筆者のために彼が勇敢に闘ったことを記しておくことにする。

三月十九日、さしもの薩軍も田原坂の険を背面攻撃で官軍に奪われたことが大勢の決する岐れ目となった。これより人吉に退きついに日向路に奔り、主力が宮崎一帯に集結したときは、もはや鹿児島との連絡は絶えていたのであった。

薩軍が紙幣発行をやったのはそのころである。その製造所を宮崎郡広瀬に置き、造幣局総裁という格には桐野利秋がなったが、工事は昼夜兼行で行なわれ、監督は池上四郎が当たり、実際の仕事は佐土原藩士の森半夢（通称喜助）が運んだ。職人は三十人ばかり使ったようである。兵站方に金が少しもないので、この造幣のことは大急ぎですすめられた。

樋村雄吾はこの新設造幣局に所属となったが、それがどんな役目か、彼自身が語る『覚書』にははっきりしない。しかし森が佐土原藩士だから同藩の雄吾をひき抜いてきたであろうことは想像に難くない。おそらく森の助手のようなことをしたのであろう。

この紙幣の体裁は前に記したから繰り返さないが、薩軍はこれを以て近在の商人や農家から必要な物資を得ようというのであった。十銭、二十銭札はともかく、五円、十円という高額札は発行のその日から頭から信用がなく、皆それを受け取ることを渋った。だが薩軍が実際に使用を望んでいるのはこの高額札のほうだから、半分は威嚇でこれがどんどん商人たちに押しつけられて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com